

第4号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十一年十二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

明達光輝

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長
編集長

大西 生一



目次

エッセイ：昼下がりの神戸線	高阪博一	1
詩：ゴスペル	バーラ・カッシー	9
短歌：秋のヒロイン	高島成子	12
詩：4編	大西裕子	14
俳句・冗句：夢幻草・音色	今駱駝	21
3号雑誌とぼく「1」	大西生一朗	23
2009年度 姫路日ノ本短期大学 幼児教育科 学生作品 最優秀賞受賞作		
シヨートシヨート：切符の裏は何色？	谷口 佳奈	30
エッセイ：精神病院闘病記	豊川 宣行	34
エッセイ：老人日記1	百天翁伽	38
詩：4編	大西隆史	41
短歌：6首	柴小路 秀磨	47
エッセイ：夫が癌になっちゃいました	水田竜子	49
競演 第一回『あつい夏』	：「高阪博一」「夏子」「バーラ・カッシー」「今駱駝」「大西生一朗」	53
編集室から		72

「エッセイ」

昼下がりの神戸線

高阪博一

播磨町という人の少ない所に住んでいると、人の大勢いる所に行きたくなる。猥雑で騒々しい大阪の町中で育った私の性^{サガ}なかもしれない。リタイヤー後はめつきり減ったが、それでも月に一度くらいは元町から三宮へ、土曜か日曜に出かけることがある。免許を持っていないので、乗り物はいつも電車、JRで行くことにしている。

先日も出かけた。元町に昼前から一時間程度いて、三宮へ行って買い物をし、駅の下りホームに立ったのは午後の二時を過ぎた頃だろうか。方向感覚が悪いせいか、こちらに引越した頃、出かける度に、よく道に迷ったものだった。大阪の南北という感覚が身に染みついている

せいなのだろう。難波は南で、梅田は北にある。神戸は違う。どう考えても東西なのだ。

土曜日のこの時間帯は、いつもそれほど混雑していないが、その日に限って人が多いようだった。「尼崎駅で人身事故のため、間引きで運転しています。ご迷惑をおかけしますが、もう暫らくお待ちください」とアナウンスが聞こえてきた。「あーあ、またか」と思いながら新快速の列に並んだ。

通勤していた当時、このケースがよくあった。「景気が悪いとこの手の事故が多くなるものだなあ」と思いつつ、時間が気になったものだ。今は時間がたつぷりある。「さあ、いつでも良いです。いらつしゃい、いらつしゃい」と余裕綽々である。だが、同じアンウンスの度重なる繰り返しには、いつもうんざりしてしまう。スピーカーが悪いのか、それとも焦っているのか、妙に甲高く聞こえてしかたがない。「大阪弁で、多少低いめ、それも、女のひとの声なら良いのに。まあ、もう少しの我慢、我慢」と待っていると、列車が滑り込んできた。

混んでいることを予想していたのだが、それほどでもない。しかし、立っている人は多い。「いつもは座れるのに」と思いつつ乗り込んでみると、幸運にも海側のそれも窓の方に坐ることが出

来た。「今日はツイてる。やれやれ」と思いながら、一息ついて辺りを見回してみた。私の隣には五十前後の女性が坐っていた。なんとなく、落ち着きのない様子で、横を見たり、向き直ったりしていた。その女性のそばの通路には六十前後だろうか、背の高い、一寸厳イカつい感じのする白髪の男性が、本を持って立っていた。その男性の横に、六十半ナカばの小柄で細身の女性が、ブランド名の入った買い物バックを重たそうに下げて立っていた。

電車が動き出した。神戸で停まって乗り降りはあるが、周りの乗客は変わらない。肩が触れ合うまではいかないものの、通路や出入口に立っている人は多かった。吊り革を持った途端に携帯を取り出し、指先をシャープに動かしてメールを打つ人、これはもう、驚異の早業とか言いようがない。難しそうに本を読む人、どんな本を読んでいるか、いつも興味が湧く。黙って窓の外を眺めている人、哀しげだと、こちらまで哀しくなってくる。そして、居眠りしている人、乗り越しには充分注意だ。振り返ると背中しか見えないが、高校名の入った汚れたジャージを着て、野球帽を被った部活帰りらしい学生が二人、楽しそうに何かしきりに喋っていた。坐りこんではいなかった。あれは迷惑このうえない。

ブラインドを上げた。昼下がりの柔らかな秋の光が、身体に纏わりついてきた。カターン・カタカタ、カターン・カタカタとリズムカルな振動が、そして心地よい加速が、身体を包んでいた。「そろそろ、須磨やなあ。あのキラキラ光る海、ええなあ」と小さな小さな声で呟いた。

「何で、席、代わんねん。俺がその女ヒトより先に、あんたの傍に立つてる。あんたが降りたら坐ろうと思つてた」と白髪の男性が、大きな声を出していた。どうも、隣の女性がバックを持つて立つている女性に、席を譲ろうとしたためらしい。「何ゆうてんのん。重そうなバックやし、それにその女ヒト、しんどそうや。私が坐つてる席やから、譲るのは私の勝手やろ」と隣の女性も負けていない。何となくバックをもつた女性が困惑気味である。

「ラッキーや」と喜んでいたのに、思わぬ出来事に遭遇してしまった。席を立て動くわけにもいかず、じつと事の成り行きを見守っていた。同じような遣り取りが繰り返されたあと、後ろのほうで声が出た。

「もうちよつと、静かにしてな。おつちゃん」と汚れたジャージーを着た高校生が間に入った。「なにー」と白髪の男性が声を荒げて予先をこの高校生に向けた。「汚い服着て電車に乗る

のは迷惑や。学生やったら、学生らしい格好で電車に乗れ」と一段と声のトーンが上がってきた。

「おつちゃん、深夜テレビの討論会みたいやな。声の大きい方が勝つんやないで。僕の服が汚いとか、学生らしい服装とか、この事には関係ないやん。席の話やろ」と低い声で答えた。「そや、その通り」と冷静な高校生に心のなかで相槌を打った。周りに立っている人達も姿勢は変わらないものの、目だけはこちらを注視しているのが何となく伝わってくる。「次や、次や。早よー、言わな」とまた声を出さずに呟いた。

「おつちゃん、どこで降りるん」と高校生が尋ねた。「姫路や」と低い声の高校生につられる様に、多少小さな声になった。「そしたら、坐っているおばちゃん、ごめん、おばちゃん見ええよね。何処まで行くのん」と坐っている女性に聞いた。「私は明石までやけど」と間に入ってくれた高校生に弾んだ声で答えた。「立つてるおばちゃんは。あ、また言うてしもた」と照れた様に尋ねた。「おばちゃんて充分。もう、年金もろてる歳やもんね。土山まで行くけど」と先ほどまでの困惑を忘れたようバックの女性が答えた。

「これで答えがでたやん。坐つてるおばちゃんは、バックのおばちゃんに明石まで席を譲る。バックのおばちゃんは代わつてもろて、明石まで坐る。明石からバックのおばちゃんは、おつちゃんに交代する。もし、坐つてるおばちゃんがそのままやったら、なんぼ、おつちゃんが早ようから傍に立つてるいうても、明石までは坐られへんもんね。どうかなあ、これで。ええのんちやう」と高校生が一気に喋り終えた。

「何となく、筋がとおつてるようや」と初老の男性が答えると、また、その男性に向つて言い出した。「そやけど、おつちゃん。バックのおばちゃんに、明石で代われとは言わんよね。西明石まで坐らせてあげるわね。次の駅やもんね。そやないと、神戸のおとこやないで」と一寸ふざけた様に言葉をつないだ。「残念ながら、神戸やない、姫路のおとこや。そやけど、分かつたわ」と微笑みながら初老の男性は、もう声を荒げることはなかった。

席の交代がスムーズに終ると、その高校生は立つた女性に顔を向けた。「おばちゃんつて、優しいなあ。そやけど、優しいことをしてもトラブルになること、あんねんなあ」とまるで母に言うように囁いた。交代して立つた女性が口を開いた。低い声で聞こえない、何を言っているのか、

聞こえない。

「まもなく、明石に到着します」と言うアナウンスが幽かに聞こえてきた。はあとして横を見た。三宮から坐っていた女性は横にいるし、バックの女性は立ったままだった。あの初老の男性は立って本を読んでおり、後ろの高校生もドアにもたれて楽しそうに喋っていた。回りに変った様子はない。「何や、夢見てたんか」と気がついた。

電車が停まった。周りの人が降りていった。ふと、あの夢の女性はどうか答えたのだろうかと思つた。「困っている人を見ると、もう一人の私が助けなあかん、助けなあかんと言っねんわ。多少のトラブルなんか、必ず解決する。人間同士やもん、あんたみたいな人がおるもん」と言うだろうか。それとも、「周りのみんな、知らん顔やつた。あの男、乱暴ヒトなことなかつたから良かった。そやけど、今どき分からへん。包丁でブスーであるもんね。そんなことになつたら怖いから、次からは譲らへんわ」と言うだろうか。

ぼんやりと目をホームに向けた。ドアがさつと閉まって、電車が滑り出した。疎マバらになつた通路に、「必要とされる方に、席をお譲りください。皆様のご協力をお願いします」という

無機質な声が響いてきた。通り過ぎて行く建物の間から、眩しい光が目に入った。「夢では坐
ったままで、何もせんかつたなあ」と小さな溜息をつきながら、窓のブラインドを下ろして光
を遮った。

了



〔詩〕

ゴスペル

その昔

種族の誇りをかけ戦い

雄詔をあげた

足踏みならし 打楽器を打つ

天と地と火 すべてを司る精霊たちに

生い茂る緑

眩しい木漏れ日 キラキラ輝いて

溢れる自由 生きている証

バーラ・カツシー

ある日突然

見知らぬ国へ連れ去られ

総てが奪い去られた

夢さえも語る事ができず

人格も認められない抑圧された

嘆き 失望 悲しみ

それら諸々総てを包み込み

励まし合えるサウンド

空を仰ぎ両手を差しのべ立ち上がる

体が揺れる

グロリーー ハレルヤ



神へのメール

月日は流れ

蘇った癒しと安らぎを与える

サウンド

過去の道程に涙するより

今 ここにある幸せを

自由を

語り 祈り 称えよう

乗り越えてきた過去のドラマ

想いはそれぞれ違っても

受け継がれ 育まれた歌声はひとつになり

融け合うハーモニー

ゴスペルよ永遠なれ

秋のヒロイン

高田 成子

枯葉こそ 風の意のまま 舞い降りて

身を粉に励む 秋のヒロイン



◆神戸新聞朝刊 31面

2009/7/22

「神戸プラス」

ネット投稿で活況

文芸誌アクトスが3号

県内外の文芸愛好家が参加する「文芸集団 アクトス」の季刊誌「総合文芸誌 アクトス」第3号がこのほど完成した。インターネットでの投稿を主体にしており、携帯電話のメールからも可。20代を中心に、着々と会員を増やしている。

同集団は、教員生活の傍ら、執筆活動が続けてきた明石市宮の上、大西生一朗さん(61)が昨年9月に設立。現在は20、60代の16人が参加し、月1回例会を開いて批評し合う一方、メール投稿のみでの参加もできる。第3号は、随筆や詩、

俳句など6分野の作品を収録。職場の若手職員らとのやりとりを、ユーモアたっぷりに再現した随筆や、切ない恋模様を託した詩など、若々しい感性が光る作品がそろっている。大西さんは「携帯メールなら、若い人も気軽に創作に取り組める。みずみずしい感性を吸い上げられる場にしていきたい」と話している。大西さん ☎078・922・4562。Eメール actus2008@ndb.nifty.com (大森優子)

短歌

藤本三千代

『抱っこして』腕白坊主甘えん坊両手を広げマリアとなりぬ

マツハ5の紙飛行機の向かう先君の未来の輝きとなる

※新聞でご覧になって、携帯で送られてきました。篠山市の方です。

詩

大西裕子

紅いあかい空の下

暗いくらい部屋の中

隙間から差し込む夕日の色が怖かった

足下に一直線に差し込んだ綺麗な色

その色が恐ろしくて

その色が怖くて

知らず目を閉じた

手の中には一通の手紙

和紙に墨で書かれた古風な手紙

達筆な文字は几帳面なあの人の性格

少し墨が薄いのは急いでいたのだろう
最後の文字の掠れがそれを物語る

手紙の中身はたった一言

その一言が自分を壊した

知りたくなかった現実

知らなければ後悔した現実

知りたくないけど知りたかった

握りしめた拳に爪を食い込ませる

まだだ　まだだ　まだまだだ

君の感じた痛みはこれ以上なのだろう

君の感じた痛みを味わいたい

なのに自分はこのことしか出来ない

虚しさが募る

幾つもの小さな弓形に裂けた掌

その傷跡をじつと見ながら思う

こんな傷では駄目だと

もつと深い傷を負わないと…

君の悲しみに合う深くて大きな傷を…

そう思い自分は真つ赤に染まつた外を見るんだ

真つ赤に染まつた空の下

この空を染めるのが自分だったなら

君の悲しみに見合つた傷を負えたのだろう

両手を空へと伸ばした

自分の全てでこの空を染めたかつた

君の流した痛みと涙

それら全てを自分が味わいたかつた

真つ赤に染まつた空の下

君が空を染めているようで…

頬に当たつた雨粒が

君が流した涙のようで…

知らず自分も涙を流してた

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

安穏と生きている自分が嫌だ

君の元に行けない自分が嫌だ

痛みを味わえない自分が嫌だ

君を裏切っている自分が嫌だ

君を助けられない自分が嫌だ

ああ…もう全てが嫌だ

醜い自分も酷い自分も全てが嫌だ

君の涙も君の悲しみも全てが嫌だ

君は笑つていればいい

自分が背負わなければいけない罪なのだから

君の涙が嫌だから自分が全て流してしまお

う
君の悲しみは嫌だから自分が全て背負ってしまおう

赤い赤い真つ赤な空の下
君に届けと伸ばした手
落ちてくる君の涙を受け止めて
泣いている君を抱きしめた

赤い赤い真つ赤な空の下
たった一人の君を想う



折鶴

黒と白が織りなす世界
そこに自分は立ち尽くす
黒と白が織りなす鳥に
君への願いを呟いた

白い世界に黒が立つ
白い世界を染めあげる
それは自分
それは君

白い君を染めあげて
君の心を踏みにじり
自分の想いを押しつけた
こぼれる涙はないけれど

君への想いはこぼれんばかり

一つ落つるは君への讚美

二つ落つるは君への感謝

三つ落つるは君への思慕

四つ落つるは君への懺悔

五つ落つるは君への愛

一つ二つと落ちるたび

真白き君を染めあげる

三つ四つと落ちるたび

黒き自分が目を覚ます

そして五つと落ちたなら

自分は君を屠るだろう

さあ目を覚ませ

白黒織りなす折り鶴よ

部屋一面に敷き詰めた

千の数超す折り鶴よ

自分の想いを知つたなら

紅き炎でその身を燃やせ

君と自分が一つになる

白き君と黒き自分

一つとなつた折り鶴に

全ての想い伝えたら

全て燃やしてしまおうよ



黄菖蒲

青く澄んだ空を睨みつけた
流すのをやめた涙が溢れる

喉から出るのは叫び声

恨んで憎んで罵倒してありつたけの呪詛を吐
いた

それでも心は暴れ狂う

「どうして殺した」

「どうして死んだ」

「どうして自分だけ生きてる」

「答えろよ神様とやら」

紅に染まつた君を抱きしめて君の最期の言葉
を噛みしめる

もう君は話さないのだと冷たい指が語りかけ

る

落ちる涙が君を温めてくれるなら泣き続けよう

けれどそんなことは無意味だと死を見続けた自分がよく知っている

ありつたけの声を上げて吼えた
この世の全てを呪った

君の体を紅の蛇が這い上がる

全身を包んで君を空へ還そうとする

冷たい君を抱きしめた手に蛇が忍び寄る

君を放さなければ諸共に空へ還れと言っているようだ

それでもいいと熱いのか冷たいのか分からなくなつた君を抱きしめた

紅の蛇は君だけを連れて行った
まだ生きろというんだ

君が居なくなつた世界で生きる意味などない
のに

黒くなつた手を見つめ握り締めた
自分の手から攫われた君の重みを確かめる
ように強くつよく

君が最期にいた場所

風に吹かれた黄菖蒲が静かに揺れていた



そして全ては無に還る

自分は異質

自分は狂気

自分は歪み

自分は悪夢

自分は自分は自分は自分は

幸せな夢を見た

笑顔が溢れて 温かい家族がいて

愛する人が隣にいて 守るべき存在がいた

その幸せが信じられなくて

その幸せを感じたくて手を伸ばせば

景色は一瞬にして霞んでしまう

そこでようやく気づく

ああ夢なのだ

そこでようやく分かる

ああ無駄なのだ

いくら求めても得られないものがある

いくら偉くても認められないものがある

だから…自分は何も望んではいけないのだ

異質が認められることはなくて

狂気が許されることはなくて

歪みが偉くなることはなくて

悪夢が望まれることはなくて

自分はその全てと同じ存在なのだ

異質の存在が異質の自分を生み

狂気の心が狂気の自分を育て

歪んだ愛が歪んだ自分を捨てた

そうして自分は悪夢となった

だから自分を消してしまおう

自分が消しても悲しむ人などいないから

だから自分が消えてしまおう

それで全てが治まるのなら

ああ…けれど最後に一つだけ

許されない自分の願いが許されるのなら

どうか最後に一つだけ

大切な君が泣かないよう祈っ

てもいいですか



夢幻草 五題

天かけし夢の一片ひとひら いま病床ここに

夢割れて幾万いくまんの蝶ちよう 飛び立てり

淋さびしさに魅みせられしかや孤愁こしゆうベツド

夢の底 疵きずより芽生めばえし 夢幻草

わが夢はマグマに抱かれし万華鏡

今駱駝いまらくだ

音色 四題

トンカチで頭叩けばたた トンチンカン

いきなりに闇を破れてほうへ 放屁連発

一人居て 悲しからずや 一人寝る

夏の夜 こおり 氷がささやく みずまくら 水枕



今駱駝いまらくだ

3号雑誌とばく「I」

ーものかきになつたわけー

大西生一朗

ようやく『アクトス』は第4号になつた。なんとか『3号雑誌』を超えたわけである。

※

3号雑誌とは「主に雑誌や同人誌など編集出版にたずさわる人達の間で使われる言葉で、読者や資金が確保できなかつたり、内部分裂などで定期的や継続的な刊行を早々に休廃止した雑誌に対する、自嘲や揶揄で用いられる場合が多い。また、月刊誌だと1号目の売上データが出版社に届くのがスケジュール上は3号目締め切り前後のため、1号目の売り上げを元に廃刊を決定した場合にこのような形

になりやすい。」というものだ。

これはネット上の世界最大の辞典ウィキペディアによる。但しこの『3号雑誌』という語句には正確性の点で議論がなされているという注記がある。

しかし、この『3号雑誌』とその説明、同人誌を発売しているぼくには、十二分に「説得力のある」言葉である。

※

ぼくは、高校生時代から書くのが好きであつた。

運動は小さい頃からあまり得意ではなかつた。といつても、小学校の時は、逆上がりも出来たし、三段跳びではクラス一番だったから、「運動が苦手」という意識も劣等感もなかつた。が、ドッチボールと野球は苦手であつた。

幼児期に肥満であつたこと、凄まじいDVという家庭的なストレス、そこ

からくる母の孤独な子育て。「きちんとしなさい」という過度のしつけが、「ミスしてはいけない」という意識を肥大させていた。集団になると「うまくしなれば」という気持ち先になつたつて、体の動きがぎこちなくなるのだ。

行進などで、右手と右足が一緒に出る極度の緊張症である。

のびのびと体を動かせなければ、運動は巧くはならない。

といつて書くことが得意であつたわけでもない。

そちらに興味がわいていく大きな理由がある。

兵庫県立星陵高校時代に、ある革新政党的の青年部に属する友人がいた。

(ゲッ！！)

始めて彼の部屋に通されてカルチャーシヨックを受けた。

なんと部屋中が本棚で、文庫本や岩波新書などがぎっしりと詰まっていたからである。

中学時代から読書は嫌いな方ではなかったけれど、読むのは『十五少年漂流記』など、いわゆる児童文学である。

目の前に並ぶ本は、文学作品とは異質のものだ。

ぼくが高校2年生当時(1964年「昭和39年」)新書というと岩波しかなかったと思う。2009年の今ほど、新書があふれ、ハツツーものまで含まれるようになったのと趣を異にする。この岩波新書、学術思想関係の本である。

「カルチャーショック」は判っていただけと思う。

劣等感・恥辱感、友達への尊敬とい

ろい感じたらしい。

(こらあかん)

と、ぼくも読み出した。新書のみならず、小説の「太宰治」などもである。いわゆる「乱読」だ。

『哲学ノート』『広島ノート』『経済学入門』などというものから、今でも、松本清張・星新一・筒井康隆・森村誠一・新田次郎・石川達三なんて名前がすらすら出てくるから、相当読んだのであろう。(作家の時代が前後しているのはお許し願いたい。)

読むと書けるようになる。

自分も表現したいと思うようになる。…といつてまとまった作品を書くかは皆無である。

※

シヨートシヨートで書いた作品を「天井小僧」と題して、児童向きにし

て童話募集に応募した。これが1979年「昭和54年」3・2歳の時だ。

なんと入選してしまう。『佳作』だが、立派な本(※1)に収められた。

「ははあ…、どうもぼくは、他人様が楽しんで読める文章が書けるらしい」と思うようになった。

で、どんどん書き出した。

小説も書くが、どちらかというと、『童話』が主体になった。

「かえるずいか」「てれびよつ」は小学館の入選作(※2)で、文化放送で高島忠夫さんに読んでもらった。

『幼児と保育』や『小学1年生3年生』などにも掲載された。当時のお金で20万円ほどの賞金や記念品もいただいた。なにせ3千数百人の中から3年連続で入選や佳作になったもので、東京から編集者が自宅に来られ

て「東京に出られる気はないですか」などとお誘いも受けた。

出版社の大部分は当時も今も東京にある。まだワープロはなく原稿は手書き、メール便も、もちろんインターネットもない時代である。

雑誌社にしても書き手が東京にいれば便利だが、地方だと校正一つ迅速に出来ない。(2009年現在便利になつたが基本的に東京中心は変わっていない。)その後短い原稿依頼もあつた。

当時ぼくは結婚して、長男が生まれたという頃である。

心は動いていた。

明石市の文芸祭の児童文学部門が設けられて最初の市長賞もいただいた。(※3)

「詩とメルヘン」(※4)には「そばづ

え」「居候時代」などというショートショートも入選して掲載されている。

小説も書いていた。専ら明石市文芸祭に応募していて、毎年、市長賞などをいただいた。

この時代、「物書きで食べていけるかも」と本気で考えていたフシがある。

もとより、作家だけで食べられる人は、しかも児童文学とくると、日本中でも、プロ野球の1球団の選手より遙かに少ない。

そんなわけで、相談した作家の方からも「食べていけるのは無理と考えた方がいい、むしろ教員をしながら趣味で書かれたらどうか」と諭された。

※

この間、『森はな学校』(※5)や『日本童話会』(※6)に所属している。

特に日本童話会の後藤樫根先生

には驚いた。毎月『童話』という雑誌を出しておられた。文教大学の教授で、書き手の育成に熱心に当たられていた。

お送りした原稿に、びつしりと朱で書き込みがあつたのには絶句した。「凄い作業をされるなあ……」と、ただただ叩頭。

日本童話会新人奨励賞を「ベートーベン」は宇宙ネコ」と言う作品でいただいた。

東京の授賞式は、出版社も招いての盛大なものである。

この「日本童話会」は、「日本児童文学者協会」や「日本児童文芸家協会」という書き手の組合(?)ではない。巨大な同人組織なのだ。

「童話」雑誌には、小川未明・坪田

譲治・浜田広介の座談会、いぬいとみこ

・佐藤さとし・長崎源之助などの作品も発表されている。

後藤榎根先生は、この雑誌を殆ど個人の努力で出し続けられていた。

ご自宅に会員が上京したときの宿泊部屋を設けられていたし、刷り上がった雑誌を自転車に積んで郵便局に運ばれていたのである。

児童文学への熱意のなせる技と言えはそれまでだが…。

残念ながら、後藤榎根先生が亡くなられると、この会は解散になった。

これだけの努力を個人的に継がれる方がなかつたのだ。

後藤先生ご本人は、「童話実作入門」などの本は出されているが、童話の書き手と言うより、「作家の育成者」というイメージが強い。

一方、『森はな学校』の森はな先生

は「じろはつたん」で世に出られた方である。62歳で日本児童文学者協会新人賞を取られている。

後輩の育成にも力を注がれ、グループを作られた。「海とめんどりとがいつめがね」は神戸新聞出版センターから出たグループの作品の集められた本である。その中の「がいつめがね」はぼくの作品だ。

ぼくは、中学教員で忙しかつたが、何度か参加させていただいた。

森はな先生の手料理が出たり、終了後2次会がもたれた。

この会に、灰谷健次郎さんが来られたのを覚えている。

森はな先生没後、この会も解散した。

(※1)「ひょうごの童話」国際児童年

記念出版「兵庫県学校厚生会刊1980年

(※2)小学館「我が子に贈る創作童話」1981年・1982年

(※3)明石市文芸祭・1984年

(※4)「詩とメルヘン」サンリオ4月号・9月号・1981年

(※5)兵庫県加古川市の森はな先生のご自宅で例会がもたれた。同人誌はなく、参加者は自作の「こびー」を必要部数持ち寄った。

(※6)東京足立区江北の後藤先生宅が本部。平成2年(1990年)に増刊号で、ぼくの初めての長編を出して貰っている。

さて、文章を書くのには、どのように

資質がいろいろのだろうか。

①本をよく読む

②文章をたくさん書く

③物事に興味を抱き観察する

と言ったあたりは誰でも考えつくが、
多くの感覚からすると、もう少しブラ
スするものがある。

④繊細―つまり神経質でよくよくす
る。小心である。

⑤自己顕示欲が強い。

⑥想像癖―変身願望―つまりことも
つばい。青っばい。

⑦突進する―つまり恥も外聞もなく
なる。

⑧頭が悪い―書く整理できる。

といったことであろうか。

※

自己顕示欲といえは、兵庫県立星
陵高校時代に、僕はなんと「演劇部」
に入っていた。

新開地にあった『道化座』という劇

団に衣装を借りに行ったり、ドーラン
を塗ったり、なかなか本格的であつた。

自己顕示欲―といつても注目を浴
びたいということより「表現したい」の
方が強かつたのかもしれない。

「注目を浴びたいのは、たれでもよ」
と、言われそうだ。

現在の素人タレント時代を見てい
たら、首肯できる話だ。

が、やはりぼくは「注目を浴びたい」
より「表現したい」という意味での自己
顕示が強かつたのかもしれない。

おまけに、家庭的な要素もある。実
母が、半世紀ほど前に「NHK漫才台
本コンクール」というのに入選している。

その後、『お昼のプレゼント』の脚本
まで書いていて、ものを書くという雰
気があつたのかもしれない。

※

童話を書き出した背景について書い
た。

『プロになろうか』
と本気で考えたこともあつた。しか
しそれは儂いゆめ。

中学教員や県の指導主事、市の役
人、中学校校長などの仕事で忙しかつ
た。

書き続けてはいたが、仕事が終わ
り、二人の息子が独立して、やっと念
願のものかき生活に入った。

童話の先輩である高濱直子先生の
後を継いで、姫路日ノ本短期大学非
常勤講師で児童文学を講義しつつ、
第二の人生に入った。

前倒して年金を貰うことにしたか
ら、なんとか夫婦二人は食べていける。
退職者の主なおさまりコースであ

る、畑仕事にスポーツジムがよい、ハイキングも始めた。

半年間、週一回の大学の講義以外に、幼稚園の保護者向け講演や、高齢者向けの講演会も月に一、二度は入る。

結構忙しくなったが、十分に時間はある。

しかし、書いても発表の場がない。

※

実は、様々な団体には所属していたのだ。

前に書いた『森はな学校』は、森はな先生の逝去で解散したし、『日本童話会』も半世紀ほど続いていたが、後藤楢根先生の没後なくなった。

「亜空間」「プレアデス」「明石。ペンク
ラブ」「水甕」に属した。

「亜空間」というのは、「ずつこけ三人

組シリーズ」で有名な那須正幹先生や「十津川物語」の川村たかし先生など児童文学では著名な団体だが、ここは誘われて入会したものの、一作発表後すぐ、会自体が「マンネリ化」を防ぐという事で解散した。

それを受けて「亜空間」におられた横山充男先生を軸に「プレアデス」という会が作られた。「亜空間」と違い、女性が多い。

梅花女子大で教鞭を執られる横山充男先生主体で、学生も多い。大阪の江坂での2次会が賑やかだ。

ぼくはたくさん発表の機会をいただいたが、次第に発表に枚数や連続作への制限がかかるようになる。古い人が書くと新しい人が発表できなくなる。

難しいところだ。結局、ぼくは市役所や中学校の管理職になり仕事很忙

しくなつて退会した。お仲間の横山正雄さん、野村一秋さんといった中年男性もその後退会したと聞く。現在は豪華女性陣中心の団体になっているらしい。

後の2団体は地元の団体だが、両方に属する女性メンバーの一人と折り合いがつかず、「めんどうだ」とばかりにぼくは退会した。

「はらがたつていた」

ぼくを知る友人たちは「大人しいぼくを怒らせるのだから相手は無茶な人やな」と理解してくれた。(と思
う?)

といて「喧嘩は喧嘩」「あほどバカの争い」である。

しかし、このあたり、ぼくは短気である。

が、頭に血が上るのは体に良くない。

ストレスにもなる。

まあもう第2の人生、堺屋太一先生の言われる「好縁社会」である。しかも所詮すべて趣味の会、無理することもなくぼちぼちいけばよい。

しかし、書く場所がない。

1999年からは、インターネット上で童話のHPを開設していたが、これもマンネリである。

「よし、では全責任を自分で被つて、自分のやりたいようにしてみるか」

アクトスが始まった。

〔以下次号〕



2009年度 姫路日ノ本短期大学 幼児教育科
学生作品 最優秀賞受賞作

切符の裏は何色？

谷口 佳奈

今日も、この駅のホームには、たくさんの死者が集まっています。

この駅の名前は「出発駅」。なくなった人達が、いわゆる「あの世」に行くための列車が出て
いるのです。

私も今日の死者の一人です。さつき切符を買ったら、裏が黒い切符が出してきました。

「裏が白い切符をお持ちのお客様は、1番乗り場に、裏が黒い切符をお持ちのお客様は、2
番乗り場にお越し下さい」

アナウンスに従い、私は2番乗り場で列車を待つています。私は少し不安でした。

「どうしてみんな同じ『あの世』に行くのに、二つに分かれているのだろう。もしかして：」

そんなことを考えているうちに、2番乗り場に列車が来ました。私のいやな予感生前か
らよく当たっていました。そして、やはり今回も当たりました。列車の行き先は「地獄」だった

のです。

私が「地獄」行きになる理由はなんとなく分かります。高校生の時から、万引きやタバコなどの非行をしていたからです。警察に捕まらず、罪を償っていなかったから、死んでからこんな目に遭うのです。

「こんな列車に乗りたくない！」と思っただけで、駅員さんはそれを許しません。結局、私は列車に乗って、「あの世」の片割れ「地獄」へ出発しました。

列車の中で、私は同じ日に死んだ友人で、裏が白い切符を持っていた山本に、持っていた携帯電話で電話をかけました。

「え？ 『天国』？ いやー、快適ですよ。やっぱり日頃の行いのおかげかなあ。なんちやつて」と、彼は実に楽しそうです。

私は悲しくなつて、携帯電話を切りました。そろそろ私も「地獄」に着きます。

「ご乗車ありがとうございます。『地獄』『地獄』です。お出口は右側です」

地獄は、私の予想していたものとはまるで違いました。普通の会社や工場がたくさんあるのです。

とりあえずウロウロしていると、私の耳に信じられない会話が入ってきました。

「お前、明日でこの会社を退職なんだつて？」

「そうなんだよー。いやー、長かつたわ」

「おれはあと二年あるわー。早くいきたくないなあ。『天国』に」

なんと、ここでは、生前に犯した罪の重さによってノルマが変わるのですが、よく働いてノルマを達成し、よく反省すると、「天国」に行けるらしいのです。

私はとてもやる気が出てきました。「地獄」で活気にあふれるのもどうかと思いますが、「天国」に行くために、私は小さな会社で、とても一生懸命に働きました。

それから一年。

私は、相変わらず、会社で働き続けています。私と同じ日に「地獄」に來た仲間達も、だんだん減ってきました。私も、もうそろそろ「天国」に行けるのでしょうか。

そんなことを考えていると、「地獄」で一番えらい閻魔様に呼ばれました。

その翌日、会社に私の机は無くなりました。

私は今、手の中に裏が白い切符を持って、列車を待っています。

「まもなく1番乗り場に列車が参ります。黄色い線の内側にお下がり下さい」

今日も、この駅には、たくさんの方の死者が集まっています。この間と違うのは、私が1番乗り場にいるだけです。

「あ、来た…。座れるかな…」

了

◆2009年度姫路日ノ本短期大学幼児教育科 学生作品集より転載

2006年の4月から短大に児童文学の講義に出かけている。「児童文学を通じた国語力の育成」が主眼である。当初は童話を宿題としてつくらせていたが、本年は童話に限定しない「おはなし」とした。完成品を全員に読ませて最優秀賞になったのが本作品である。ショートショートの種類で、もう少し書き込みが必要だが「生きる」ということについて考えさせて貰うと話している。今後も少し載せてみたい。

精神病院闘病記 (一)

豊川 宣行

私は、〇県K市の端、山に囲まれた病院に入院している。

病院は中庭を中心の口の字型に建っている。中庭は運動場になっていて、金網フェンスで囲まれ、その上に有刺鉄線が張つてある。

運動場は閉鎖病棟である第一、二、三病棟しか利用できない。

病院の端には、託児所、医師専用の駐車場、給食工場、売店、歯科医院がある。

病棟は七病棟までであるが、四と六病棟は欠番になっている。

第四病棟は「死」に通じ、第六病棟は「碌ろくでなし」に通じているところ頃改めて想う。

私の入院している第七病棟は、病院の中では軽度の患者がいるところだ。

六名の相部屋が八室、個室が三室、計五十名程度の患者がいると思うが正確な人数は数えたことがない。

それに対して看護師、准看護師が七名いる。夜勤は二名体制になる。

病棟の窓に鉄格子はなく、窓全体が鉄の納戸のようになっていて、ガラス部分は拳が入る程度にしか開かない。

この第七病棟は、部屋を出るのも自由だし、棟からの出入りも自由だが、病院の敷地内だけである。敷地外に出るには許可がいる。

病院の前には川があり橋が架かっている。入った後は自由に渡ることが出来ない一方通行の橋である。

第一病棟から第三病棟には、精神統合失調症、昔の呼び名は「精神分裂症」の方、薬物中毒、重度のアルコール依存症の人などが入っている。入院は二、三十年という長期にわたるケースが多い。

トラブルも多い。ものを盗った盗られたの喧嘩などは、茶飯事である。こういった場合は原則、「喧嘩両成敗」で独房行きになり、落着まで二、三日かかる。

この病棟の患者が売店などに行くときは、両側を職員がガードして移動する。

第五病棟には認知症（痴呆症）の老人が多い。

つまり、第一から三は重度の閉鎖病棟、第五は認知症など、第七病棟は軽度という分け方である。

この第七病棟には重度の処から病気が軽快して移ってきた人もいる。しかし薬物中毒や強度のアルコール依存症は、治るのに早くても三、四年かかる。

私はこの第七病棟の個室に入っている。

広い部屋に、ベッド、トイレ、洗面台も付いている。但しテレビはない。食堂で見ることになる。

第七病棟に朝が来た。

続く

追記

私はこの原稿を第七病棟の食堂で書いています。個室には机はないからである。私の病名は「うつ」そしてアルコール依存だ。

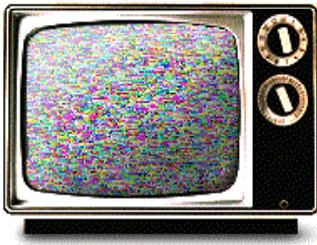
文章を書くのが辛い。どうしても散漫な調子になつてしまう。

脳を絞る様に一字ずつ書いていく。

これから第七病棟の様子、人々の生き様を描いていく。

他人様のことを描くのは驕りかもし

れないが、あえて書き進めていきたい。そういうことを書き残すこともまた文学だと思ふからである。



老人日記 1

百天翁伽

「おっちゃん、やめてえな」

と叫びたい気がするが、グツと我慢をしている。

増え続ける中高年のスポーツジム通いは、一応結構なことなのだが、これは困る。

入浴のマナーである。

といって僕が完全無欠と言うことではない。まあまあマナーを守っているな、と思う程度である。多分、潔癖な人から見たら、「なんだ」と怒られそうだが、大多数の人のする程度のことにはしている。

だがこれは勘弁願いたい。

浴室からあがつて、脱衣場で体を拭いているのだが、ななな、なんと、足をベンチの上に向けて、お拭きになるのだ。



言うまでもなく、このベンチには裸のおしりを下ろして座られる方もいるわけで、床を歩き回ったり時にはトイレに入ったりした足の裏をべたりと載せる場所ではない。

今までに2回見たが、一度は30代の男性、二度目はどう見ても70歳前後の男性である。

「注意したら」

と言われても、怖い。

体を洗っていてシャワーの

水が飛んできて、続くようだ」とおっちゃん、水とんできようで」とも言える。

しかしまずこの場合、直接迷惑を受けている者はいない。ついで、足の裏をベンチに置いて良いかどうかは議論のあるところだろう。

「尻言うても、風呂に入っていない尻やつたら、あがつたばかりの足の裏の方が綺麗やないか」

と言うのも一理ある。

「しかし…」

やはり、座るところに足を載せるのはまずい気がする。

因みに、目の前の壁に貼つてあるマナー集には、何も書いていない。

かけ湯をしろ、つけ針は外せ、体を拭いて浴室からあがつてこい、といった類である。

ベンチの縁に足の裏をこすりつけて、汚れを落としている姿を見たこともある。みんな知らん顔で、実は恥ずかしながら僕も知らん顔だ。

「はてさて、どなしたらええんやろか」と、ため息をついている。



詩

大西 隆史

銀河

一人で

星を見ること

お菓子を焼くこと

街を歩くこと

本に涙すること

さみしいねって

言うかもしれないけど、あなたが分からない

ことが一つある

さみしいことだつて素敵なんだつていうこと

自分の中に

ひとりだけの惑星を見つけて、ちかちかと瞬くこと

そうして遠い遠い距離を瞬きあう惑星を見つ
けられたら

さみしさはぼんやりとしたやさしさに包まれ
て

きつと、素敵なことだつて思えるはずだ

一人で

星を見て嘆息し

お菓子を焼いて、馥郁たる香りに笑みを持ち

街を歩いて小さなざわめきに耳を傾け

本を読み打ち震える

そんな

素敵なさみしさを共有できる

はるかかなたの惑星を
夢見る

そう考えながら

そつと銀河を旅するのだ

2000億光年のかなたへ

第61回西医体卓球部門

たつた一つの白球が支配する

それは残酷なことなのかも知れない

だが

それは酷く美しい

敷き詰められた台の上で行われるドラマ

たつた一つの白球を追い

たつた一つの白球に涙し

たつた一つの白球が別つ

蝉の声が遠くから聞こえる

陽炎が世界をゆがめる

しかし、そこに確かにあるのは厳然たる壁

厚い壁

けつして揺るぎはしない

終わりは訪れる

歓喜の涙の影に敗者の涙

同じようである

違うようである

二つの涙

彼らの生命の輝きが

酷く

美しかった

たった一つの白球が支配する、この世界で

生きる

ふと振り返る

自分の歩いてきた道を

多くの人の足跡と混ざり合い

時に寄り添い

時に離れて

自分の足元へと続く

前を見る

まったく先が見えなくて

一歩先にあるのは

未来への道か

はたまた崖か

すくむすくむ

失敗を恐れるな

ミスを恐れるな

怖いものは怖い

それでいい

怖いのは自分が歩もうとしていることだから

怖いのは自分を進歩させようとしていること

だから

前に進む

たとえ崖から落ちようと

また戻ればいいのだ

この道へ

前に進む

また戻れるから

ミスを恐れなくてもいいんだから

海岸線に続く足跡を

波がさらっていく

過去

現在

未来

交差する今を生きていこう



夜空

夜空を見よう

やんわりとした春の夜空は
月をそつと抱え込み
星に生きる喜び

堂々とした夏の夜空は
月と大いに笑い合い
星に生きる意味を語る

飄々とした秋の夜空は
月をからかい弄び
星に生きる楽しさを語る

きりりとした冬の夜空は
月と戦い認め合い
星に生きる辛さを語る

夜空を見よう

一日に一度しか顔を見せない
紳士・淑女な彼のお方を

語ろう
夜空と

例会報告

※詳細は「アクトス通信」に掲載。

いずれも場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C
第7回例会

平成21年7月11日(土)午後3時

5名の出席。「柳歌」の図書館世界の説明。そのあと、高阪博一さんの随筆「忘れものつて？」を読んでいただいてから合評。余韻のある良い作品。例会後膳屋で3名で食事。小一時間。

第8回例会

平成21年8月8日(土)午後3時・3名。俳句と詩の合評。

第9回例会

平成21年9月12日(土)午後3時・5名。詩の合評。

第10回例会

平成21年10月10日(土)午後3時・5名。随筆合評。

第11回例会

平成21年11月14日(土)午後3時 4号が完成しておれば
4号の使用。



(生一朗)

◆ 支援会員の今井由利子さんが亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

◆ 新会員として、松田政雄さんが入会されました。

短歌

柴小路 秀磨

いつまでも年老いたるを拒むごと子らと共に走る喜び

橋上を行き交う人ら前見つめ我は走りて川面眺むる

●アクトス—文藝集団—●《同人募集》

20~60代の16名が在籍する『アクトス』は、特定ジャンルだけではなく文筆全般にわたり執筆する文化団体として活動。「書きたいという気持ち」があれば誰でも参加でき、携帯あるいはネットだけの参加も可能。活動内容は①創作②月1回例会での合評③年3回同人誌(アクトス)を発行。入会金不要、会費(一般)月1000円/(学生)500円。◎例会は毎月第2土曜日に学校厚生会サンピア明石にて午後3時から開催。*変更の場合も有 ◎作品提出(2月、6月、10月末)、同人誌アクトス発行(4月、8月、12月の3回)◎概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰。*作品の提出は携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。(ペンネーム使用可)◇詳細は下記迄お問合せ下さい。▼連絡先:〒673-0031明石市宮の上1-17-614(大西方)アクトス編集室【TEL&FAX】078-922-4562【X-ll】actos2008@mbe.nifty.com【アクトSHP】http://www.justmystage.com/home/actos2008/

↑ミニコミあかし
第311号
8月20日発行

輝やける青年の日よ向日葵の如くに我は陽を浴びて
奈良坂に諸手を広げ向いたる古き御寺の大いなる門 (東大寺転害門にて)
穴道湖に沈む夕陽にせかされてシャワーも浴びず街に飛び出す
今度こそ争い避けて和まんと妻に送りしメールの一言

てんがいもん

夫が癌になっちゃいました

水田 竜子

春の嵐が吹き荒れる3月半ば、医師より告げられた病名は『前立腺癌』だった。

夫の中ではひよつとするとという思いがあつたのだろう、冷静に事態を受け止めていた。

帰りの車の中では私のことまで気使ってくれるほどに。その日は病気のことはお互いの口から出さず、何を見たかは忘れたが、ビデオを借りてふたりで見た。娘ふたりにも病名を話すと、とても悲しがついていたが「みんなで乗り越えれば何とかかなるよ。」娘たちも、父親を支える気でいてくれることが心強かった。

人生には何があるか分からないとよく言われるが、まさしく今がその時だった。

日が経つにつれ実感がわき悲しみがこみ上げてくる。

夫は1週間のうちに何度か転移がないかの検査を受けた。肺・膀胱・肝臓・腎臓いずれにも転移はなく、ほとと胸をなでおろせたが、一番転移しやすいといわれる骨の検査が半月以上も先だった。インターネットで検索すると、仮に骨に転移していれば、5年生存率は30%と低い。腫瘍マーカーをみると転移があつてもおかしくない数値だった。

娘たちと「もしものことがあれば、お父さん定年まで生きてられるか分からないやね：」という究極の会話が口をつく。きのうまで健康だと思っていた人が、先の命が危ぶまれるなんて：。年をとるまで一緒にいられると確信していたのに、夫の死をそう遠くないところにおかねばならなくなるかもしれないと、悲壮な気持ちに包まれる。とまどいと悲しみが朝起きれば胸によぎり、重く心にのしかかったまま1日が過ぎていった。来る日も来る日も。だが、夫が一番つらかったことだろう。家族が揃うと孫を囲んで楽しく笑う、楽しければ楽しいほど悲しみも深くなる。その場から離れると涙がしぜんにこぼれてくる。今までの月日が走馬灯のように思い出された、楽しい記

憶ばかり。

結果がでるまで一日千秋の思いだった。

いよいよ結果を告げられる当日、待合室で待っている時間、夫の心臓の鼓動が聞こえるようだった。

「骨には転移はありませんね」

「本当ですか」

思わず聞き返してしまった。

転移なし。どんなに待ち望んでいたかこの言葉を!!!

外の景色がいつもより明るく見える。娘たちともバンザイ、やった!と叫ぶ。「命びろいした」と言う夫の手を握りうれし泣きました。

命の重さ。普通に暮らしている日々の中では考えもしない、その重さを夫は病気で分かったその日から体中で受け止めた。

余命を宣告されても前向きに生きる人のドキュメンタリー映画やドラマ、本を図

書館で借りたり、買つては二人で読みふけた。

自分の病氣と向き合い、あらゆる本を読み、知識にした。いいと言われることは何でもやろうと今も心がけている。大病をしていることを回りに感じさせないくらい前向きである。すごいなと思う。

今朝も放射線治療のため、片道2時間の道のりを京都大学病院まででかけた。足元軽やかに、手には京都のガイドブックを持ち一見いそいそと。

「何事もなく、治療が終了しますように」

夫の後ろ姿に今日も手を合わした。

競演 第一回

第8回の例会で、「タイトル」を決めて作品をかいてみれば面白いのではないか、ということになりました。第一回のタイトルは『あつい夏』です。「あつい」は「暑い」・「熱い」・「厚い」・「篤い」と意味するところがたくさんあります。また例えば、「暑い」を一つとつても「灼熱」・「焦熱」といった言葉もあります。イメージを大きく膨らませて、詩・俳句・短歌・川柳・随筆・小説・紀行と表現方法は自由です。

「競作」か「共作」、はたまた「凶作」「狭作」「狂作」と考えましたが、『競演』と題しました。お楽しみください。

あつい夏（蟬に寄せて）

高阪博一

ドアを開ける。明けやらぬ朝の光が涼風スズカゼをはこぶ。横を見る。背のパツクリ割れた

抜け殻が目に入る。消えかけた朧な電灯に黒みがかつた茶色の殻を透かす。

ナナトセ
七歳の黄泉をぬけたぞ蟬のから

川沿いの道に出る。赤く色付いていた東の空が青白色に変っていく。道端の木に、じつとして、重なり合っている二匹を見る。光は輝きを増していく。

上にのり慕オモいを遂げたつがい蟬

遺跡の森に入る。弥生の昔、竪穴に緑の草が茂る。上を見る。塊のような単調な声が降ってくる。下を見る。腹を上にした屍骸が真上の太陽を浴びて乾涸びている。

橙の腹を曝すか蟬むくろ

小さな宮に到る。苔むす狛犬が迎える。木々の間から光が優しく溢れる。前に立つて手を合わす。薄暗い祠ホコラにあの聲がこだまする。もう一度、手を合し耳を澄ます。

七歳ナナトセの後も鳴け鳴け蝉ノチしぐれ

静寂の影を孕んだ陽ヒは溢れる命を忘れたように西の空を琥珀に染めて沈んでいく。

溢れる命よ、蘇れ。

環タマキはある、きつとある。

了

夏の海……恋のはじまり

夏子

ジャンプする　飛び乗れそうな夏の雲

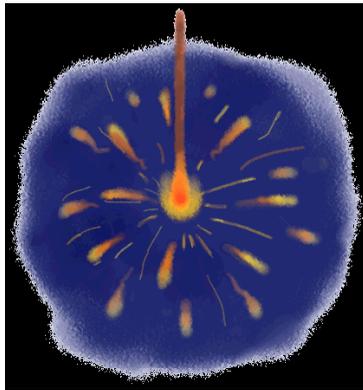
キラキラと真つ赤な太陽　二人の海

ふり向けば君が両手を広げてる

夕焼けが二人の頬を照らす頃

眼を伏せる　線香花火が消えたなら

友達が恋人になる日　夏の海



俳句三首

蝉しぐれ 暑さ苦行の 遍路旅

菊花展 負けじと競う 厚物も

初詣 着物に合わせ 厚化粧

バーラ・カツシー

あついで夏

今駱駝

あついで夏 かきし夢 皆そこぬけて

愛の とげ 背にささりしまま 半世紀

天かけし 夢の一片 ひとひら いま病床に ここ

あついで夏　　―素晴らしき新世界―

大西　生一朗

今日もよく晴れた夏空が広がっている。

ここ、十数年ほど、夏は高温多湿、冬は私が子ども頃のように氷が張る。気候にメリハリがあり、安定した変化をしている。

それにしても気温が三十五度をこえているので、汗が滝のように噴き出す。マンシヨン五階の部屋までの水運びは、七十二になった身には日課とはいえ、一番辛い。

おまけに下着一枚の裸にするわけにはゆかない。Tシャツでもいいのだが、実はもう長い間、下着がわりがTシャツなのだ。

下着はない。部屋の中で着ている分には、汗は大したことがないから、来客があつてもこの姿でよい。だが汗をかくと肌に密着して下着を着ていないのがわか

つてしまう。いくら老婆とはいえ、仕方がないので、外に出るときには、古い木綿のワンピースを着るが、その表にまで汗がにじみでてる。

それも我慢である。「ただで出来る運動と思えばいい」と人は言うが、なかなかそうは達観できない。しかし、耐えるしかない。両手にバケツを下げて十往復をしなければ、ろくにトイレも流せなくなる。

一、二階の家ならこれほどの苦労はない。送水時の水圧だけで、水道が出る。だが、朝夕一時間ずつの間給水だし、赤錆がでやすいので、却つて結構手間がかかるらしい。

「手伝いましょうか」

なんて誰も声を掛けない。もう、十年もそんな言葉を外で聞いたことはない。

止まると思われた少子化は限度無く進み、今では、三人に一人以上が七十五歳以上の超高齢化社会である。

二千年の頭ぐらいまでは、六十五歳からを高齢者としていたが、二千十二年に、七十歳からとなり、二千十二年に七十五歳からになった。

寿命は延び続けて、男、八十九歳、女、九十八歳である。個人差は大きい、高齢者が労働力として使われるものになるわけではない。五十代の半ばに、老眼に白髪になるのは、生物的に老いてくるからである。七十五歳ぐらいまでは、何とかなる人は総て働いている。だから街は、なすすべのない高齢者だらけだ。

若い人はほとんど、農場にでている。昼間、街に残っている中では、私など若いほうである。七十八歳になる主人と五十と四十七歳の息子二人が、農場に出ているから、「労働者三人以上の家庭では七十五歳以下の健康な者一名が残留してよい」という規定によつて、私は家にいることができる。

「結婚できてよかった」

今ではそう思う。独身男性・女性が世に溢れたの

が二十世紀末からであつた。男女同権で、女性も賃金は男性並になり、学歴も女性の方が高いくらいであつた。誰が苦勞を背負い込む結婚などするものか。気に入れば同棲ですむ。一人暮らしに不自由はない。子どもはなくても社会保障制度が発達し、少しの金さえ貯め、保険に加入しておけば老後は安心であつた。動物は自分の子孫を残したいなんて言うのは真つ赤な嘘で、進化した人間はただ、異性の独占欲と、性欲だけの権化である。自分の老後が保障されれば、面倒くさい子育てなんぞ誰がするものか。

漠然と結婚願望はあつても、それはただ、社会的認知を求めることと、自分の人生が楽しくなるだろうと言う淡い期待だけのことである。決して社会の構成員としての責任を果たすためではない。世間並みに結婚しておこうとするだけで、別に無理してまでもなくてもよい。第一情報は溢れすぎ、真の静かな結婚生活のよさは報道されず、自己実現とかで「私が

私が「の方が大切だ」という世の中である。結婚しても
じやまな子どもはつくらず、つくつても一人にとどめ
る。子育ては大変である。社会のバックアップも一時
は期待された。「こども手当」なんぞというものもで
きた。が、日本がつぶれかけている今はゼロに等しいか
ら、そんなことで自分の人生を無駄にはしたくない。
事実、独身の方が豊かで楽しい生活が表面的には出
来る。

結婚がすばらしいものだとはいえない、そんな
中で私は結婚した。そのあたりから世の中が、だんだ
んおかしくなってきた。二千九年の世界大恐慌から、
一旦回復した経済も長くは続かなかつた。

不景気が世の中を覆い始めた。

日本では江戸時代いらいの総無責任体制が続い
ていたから、誰も責任をとらず、だから、有効な対策
も打ち出せず時が過ぎた。

イギリス型の、溢れる資産を国際投資して繁栄を

持続しようとしたけれど、十九世紀のイギリスのよ
うに植民地があり、その後も大英帝国を維持した立
場と違つて、どこにも仲間がない。また日本のように
資産運用をしようという国が多くなりすぎていた。

やがて、第二次大戦前のようなブロック経済が復
活し、ヨーロッパ共同体・アフリカ統合体・ソビエト新
連盟・アジア共同体・北南米連邦、とかが、世界各地
に出現した。

日本はどこにも入れてもらえなくて、自動車も、
鉄も船も、コンピュータも何もかも買ってもらえない。
第一、一時は日本製品は、安くて高品質だったが、い
つの間にか高くて低品質に成り下がっていた。

ロボットや、ロケット、航空機、電気自動車太陽電
池パネルと、最先端の技術も芽が出かかると、「情報
開示せよ」と中国辺りからやられて、まんまと奪わ
れてしまう。要求に応じなければ、レアメタルも食糧
も売ってもらえない。

第一、政治に戦略がない。民主党という政党が政権をとつて一時よくなつたが、またぞろ自民党と民主党の一部が手を組んだ。「国家国民なんぞより、自分の利益と権力」である。

まずいことに、それを支持する古い農民、古い企業家に対してはうまく利益はあつたから、そこが支持した。不満はあつてもバラバラな一般国民は、直接給付などの目の前の利益につられてますますバラバラにされた。

国家に目標も戦略もないから、新しい芽も伸びない。リスクを恐れて、誰も挑戦せず、責任をとろうとしない。

技術は伸びず、やがて中国製品にも追い越される羽目になつた。

だから、製品は海外に売れない、売れないから金が入らなくて、石油も鉄鉱石も小麦も何も買えない。またどこからも仲間はくれだから売ってもらえ

ない。

戦略はなく、ただアメリカに追随していたが、技术力量を無くした日本より、中国などとの関係の方がよほど大切だ。それもブロック化してしまえば、遠い太平洋の端の日本など、もうなんの魅力もない。

昔と同じく、戦争に持つてゆこうとしたグループもあつたらしいが、さすがにみんなは昔ほどバカじゃなく、戦争は起きなかつた。

政府も石油などの自力開発に努力したけれど、いつものことながら後手後手に対策が回つて、今では原子力発電が命の綱らしい。エネルギーがその有り様だから、生産活動は殆ど全滅で、国民は総出で農民となり食糧の確保だけにまさに懸命となつているのだ。

部屋の中は蒸し暑い。急いでTシャツ姿になる。

エアコンも扇風機も、ひよつとしてまた使える日がくるかもしれないと、カバーをしておいてあるが、恐ら

く無駄なことだろう。

生温い水を飲むと、掃除をする。LDKがフローリングなので助かる。四階の武田さんのところは絨毯張り、箒が使えず苦労しているらしい。

一番困るのはトイレである。ウオッシュレットという暖房便座は何の役にも立たない。

後始末はバケツの水を流すのだが、これがうまく流れない、思わぬほどたくさんの水がいるのだ。換気扇が使えないから、マンションの密室形式は臭いもこもつてしまう。おまけにトイレトーパーが高くなくて、今では昔ながらに新聞紙を揉んで使う。ところがこれが詰まりやすい。たまの風呂や行水の水を溜めおいて使うのだが、流れないのには往生する。もつとも、下水は直接放流せず、各地域ごとに溜めておいて、肥料化する。考えれば自然のリサイクルである。当たり前のことだが、恐ろしいことに、二十世紀末前後はこれをただ流していたのだ。

これだけ経済が悪いのに、二十世紀末にあつた大金融機関は、一部外資系と合併したものの、ほとんどそのまま残っている。世紀末に不良債権騒動があつたが、結局誰も責任をとらなかつた。日本という国はいつもこれで、アメリカでは金融問題の時に二千人の逮捕者が出たというに、我が国では大騒ぎして結局三桁の逮捕者もでなかつた。

能力がないのに威張り散らした者が、経済が破綻してもそのまま居残つたという不思議なオリエントの国である。これでは世界の動きについていけない。

イギリス型に経済は軟着陸すると誰も考えていたが、現実には甘くはなかつた。

電気は夏は夕五時から九時まで使える。といつても一軒に蛍光灯五本分。

すっかり壁が黒ずみ、張り替えもままならない部屋では、配給のプロパンガスで、配給の米を炊く。

国会議員も、人口が三倍あるアメリカより多かつ

たのが、ついに前の五分の一になった。ただの宿舍をあてがいで、秘書を二人も付けるといった、そんな贅沢が出来なくなつた。

人口がどんどん減つて八千万人になつてゐる。経済は破綻してゐるのに、まだ議員の数は多すぎると私は思つてゐる。

国民は、二十二十年代初めまでは随分と不満もあつたが、どうにもならなくなつて、いまはどういう訳かみんな大人しい。肥満問題も、ダイエットもない。みんな痩せてがりがりだ。ゴルフもテレビもシヨッピングも車も何もない。

一部の偉いさんは相変わらず贅沢だが、これは完全に雲の上なので、そう嫉妬心もわかない。テレビ番組もニュースに古い映画が中心だ。

独身貴族は存在しない。

考えてみれば当たり前前で、人は動物でもあ

る。伴侶を見つけ子どもを作り、明日に命を続けていく。それをしないで構わないという人種を作り出し、その生き方が堂々と

まかり通りだしたのは豊かであつたからだ。そしてそのあたりから、歯車が狂いだした。

自分の子どもに、よりよい社会を残そうとしない者が、よりよい社会を作れるわけではない。

独身で家庭も子どももない人間が、学校の校長になり「子どもたちや親の気持ちを理解できる」と言うあたりから社会はおかしくなつた。確かに独身でも、なまじ家庭や子どもを持つ人間より素晴らしい人はいる。だがそれはいるというだけである。口に出さずとも誰もが認めるその希少な存在を普遍化して、当たり前のように主張し始めたあたりから、平凡な人間はいやになる。まともな真面目な中間層を評価しない社会が、存続できるはずはない。離婚は当たり前で、出来た子どもの面倒は女に押しつけ、つまり、

国に面倒を見させる無責任男性。女あさりをして、結婚再婚を繰り返して、子どもは作らず、セックスだけを楽しむ男、そして女。

威張るだけで本当は能力がなく、国際競争に勝ち抜けない政治家や企業経営者が、のうのうと豊かに財産を築き、失敗しても責任を負わぬ社会が、国際的に生き残れるわけはなかった。

二千二十五年の自衛隊のクーデターは、曹クラスが起こした世界初のクーデターで、アメリカあたりも驚いたらしい。

尉官クラスは、大学出、防大出で、頭の中だけの危機意識であったが、曹クラスは、生活もままならず、まあ、昔の農民一揆みたいなものだった。

インターネットなどで団結した下士官グループが反乱した。面白いことに彼らは、文民統制の意味を、尉官たちよりよく掴んでいた。クーデターを起こして

政権を握ったが、極端な不正を直すと、議会に主導権を譲った。

軍人が国家経営など出来るはずのないことをよく知っていたのである。

アメリカも自分たちの体制を脅かすものでないことがわかって、黙認した。甘い汁を吸っていた政治家や役人たちは、財産没収の上、最低十年の遠島への流罪、永久所払いなんていう罰則に息の根を止められた。

犯罪現場でも、被害者の人権を守らず加害者の人権を守るおかしな社会は息の根を止められた。悪意ある殺人は、「無期懲役」などといって、結局、三年で出てくる愚を改め、「終身刑」にした。

流石に、「市中引き回しの上打ち首獄門」というのではないが、アメリカ流に罪を加算して、懲役二百年なんていう罰則が出来た。汲む情状もないのに、故意に

人殺しをした暴力団員が、懲役五年で済むなんていうこともなくなつた。暴力団員が素人を殺せば、軽く懲役百年である。

「万引き」という変な言葉はなくなつた。「どろぼう」が復活した。

同学年の四割が万引き経験者などと言う「キテレッツ社会」は姿を消した。「どろぼう」は泥棒であつて「万引き」などとややこしい言葉は使わなくなつた。

泥棒をした者の腕に刺青を入れるという江戸時代もどきの案も出たが、さすがに受け入れられなかつた。

ただ累犯者は、常習的性犯罪者と一緒に、GSPの装着が義務づけられ、行動範囲が制約された。

一部はアメリカでは前世紀から行われていたことである。

家事労働も洗濯機や掃除機が使えないから、大

変である。洗濯板も復活したが、夏はともかく冬は手がかじかむ。しもやけやひびあかぎれが広まつているらしい。栄養が不足しているせいもあつて、珍しく青ばなを垂らしている子もいる。下着からズボンに至るまでつぎあてが復活したので、足踏みミシンがおいである。朝から晩までそんな家事をしながら、ラジオを聴く。

私の唯一の趣味はそのラジオを聴くことである。鉱石ラジオはありがたい。電気も電池もいらぬ。もともと電波は、電気だから、アンテナ線で拾つてやれば、電気に戻るわけである。電気が弱いのでイヤホンでしか聴けないが、一人ならこれで十分だ。もちろん、太陽電池型もあるけれど、少々価格が高い。

私の兄弟は弟が一人だけだ。家族と元気に過ごしているので感謝しなければならぬ。両親は、どうの昔に他界している。

主人は元気だし、悩みといえば、四十を越えている

のに独身の息子二人のことだ。結婚はさせてやりたいが、結婚して子どもが出来ても十分に食べさせてやれない。勿論、学校へもやれない。二千年前後は、二人に一人近くが大学に行つたらしいが二千三十年には十人に一人になり、いまでは千人に一人ぐらいらしい。

「麗子さん」

ちよつとぼんやりしていると、隣の「玲於奈」が声をかけてきた。

七十代の二人の名前が「麗子」「玲於奈」というのは、少し前までは違和感があつたらしい。これは昔の、個人的な名づけ流行のなごりである。いまではそんな名前の老人ばかりで、ごく当たり前のことになつてゐる。

マンションのベランダにある隣との境戸は、破れて久しい。

「ほら、なすび、どう？」

立ち上がつて、聞きつばなしのガラス戸から出ると、枠だけになつた境戸の向こうに、日焼けした玲於奈が手を差し出して立つている。

「あら、すてき、ただけなの？」

玲於奈が、見事なナスが七つも乗つたざるを差し出してきた。

「それじゃあ、焼きナスにでもして、久しぶりに。ビールもあけようかしら」

「あら、ビールがあるの？」

玲於奈の目が光つた。

隣の片上家は、夫婦二人暮らして、配給のビールも少ない。百五歳の夫と九十八の玲於奈の年金暮らしてある。

年金は、二人で月額四万だから、余分なものはない。物価は、半世紀のあいだ、ほんの少しずつ上昇しているが、まず大した変化がない。賃金や年金は四

分の一以下になっている。

「ビールがなければ、少しおわけするわよ」

言つてしまつてから、ちよ



つぱりしまつたと思ひながらも、部屋に引つ込んで、冷蔵庫からビールを二つ持ち出した。第七のビールといつて、原材料はアメリカ産のトウモロコシらしい。牛のえさにするよりビールにした方が儲かるという。350ミリリットル四十八円もする。

もちろん電気の缶詰と言われるアルミ缶ではなくて、強化紙パックである。

冷蔵庫は小さな冷凍ボックスで、自宅で使つていてテレビとともに、唯一と言つていいほどの電気製品だ。

「すごい、悪いわね」

玲於奈は遠慮せず手を伸ばす。

夫と息子二人の給料をあわせても、現金は9万円

だから、贅沢品である。

「さあ、そろそろ」

「夕食の準備？」

「そう、三人も大の男が帰つてくると、大変だわ」

私は笑みを浮かべて、片手をあげると、部屋に引つ込んだ。

簡単に自分の昼食をすませ、買い物に出て、帰つてくれば、ベランダに出して暖めておいたバケツの水を風呂桶に注ぎ、食事の準備をしよう。

夏は、風呂の燃料代がいらないので助かる。

銭湯も復活したが、マンションのあがり降りだけで、行くのも大層だ。

第一、現金収入は貴重である。主人や息子の勤める農場は、現物支給が五割なのだ。

米とサツマイモ、それに今日はごちそうがある。鰯が安いのだ。

玲於奈からもらったナスは、明日に回し、今日は

鯛にする。

夕食の準備をしながら、遠い農場から自転車で帰ってくる主人と息子を待つことにしよう。そして今夜は主人のズボンにつきあてをする。

私は頭の中で予定を再確認すると、ゆつくりと立ちあがった。

了

同人募集

アクトス -文芸集団-

新しい文芸グループ「アクトス」をたちあげました。
楽しく『和』を大切にします。

活動内容

- 1 特定のジャンルではなく文筆全般にわたります。
①創作 ②合評(例会) ③同人誌(アクトス)の年4回発行
- 2 参加資格はありません。「書きたいという気持ち」だけで結構です。
- 3 義務は ①会費、月額1000円 入会金なし [学生は月額500円]
(会費には同人誌代・郵送費等の事務費含む)
※1年前分納。(前期・後期の2回分納可)
(途中入会は半年単位で考えます。納められた会費は返金しません。)

▶活動の具体は、以下の通りです。

- ①作品の提出(3月、6月、9月、12月末) - 5、8、11、2月の4回、同人誌(アクトス)発行。
- ②無料で2部受け取る。(余分に必要時、作品提出時に申し込む、頒価1部500円。)
- ③各月第二土曜日 学校厚生会明石サンピア 午後3時~(22/1のみ午後6時~)
(例会 - 時間は変更があるかもしれませんが、問い合わせ下さい。例会出席は自由です。出席したときは、会場代・茶菓代などとして1000円必要)
- ④概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰
※携帯あるいはネットだけの参加も可能です。 ※ペンネーム使用可(推奨)。

作品の提出は、携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。扱えない方は、相談させて頂いて郵送も可能とします。

例会後は懇親会、また旅行なども計画してゆきます。

運営は当分の間、例会などで相談・連絡の上、会長が決定しておこないます。

平成21年、1/14(朝日新聞「あいあいAI」で紹介)1/20(神戸新聞『ミニコミあかし』で紹介)。3/31神戸新聞地域版(県域)で紹介。

平成21年4月1日 アクトス会長 大西生一朗

連絡先:〒673 - 0031

兵庫県明石市宮の上1の17の614 大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール:actos2008@mbe.nifty.com



・アクトス誌のホームページ及び携帯用ページは下記の通りです。

◆HP <http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※PDFファイルで、1冊丸ごとご覧頂けます。

◆携帯 <http://www.justmystage.com/home/actos2008/Top.htm>

※左のバーコードからご覧下さい。俳句・柳歌・随筆のテキストのみです。

◆編集について

※字の大きさは編集の方で、収まるように配置します。従って、「小さくなる」場合や「大きくなる」場合、多段になったりする時もあります。次号以下に繰り越す事も出てきます。また、掲載の順序なども、順不同で、編集が適宜配置します。

※一回分は概ね最大2000字程度(400字詰め5枚)としますが、内容・提出数などによって、変更します。原則、一ジャンル一作品。複数ジャンル(複数作品)も可です。但し、編集によって掲載の可否は判断します。

※原稿は原則デジタルデータとします。返却しません。紙原稿の場合も大きな活字で印字してお送り下さい。万一、手書きの場合も含め、短いものにして下さい。入力を手分けして行います。※メール添付の場合、末尾に空白がたくさん入っていたり、「」マークは使わないで「」にして下さい。また、タイトル作者名を本文中に入れておいてください。※総てコピーをおとりの上提出下さい。

※カットは、書かれる方があれば、カラー・白黒を問わず使用します。ただ、大きさや配置については一任していただきます。また印刷は家庭用プリンターで紙質も良くないのをご了承下さい。写真も同じです。返却しません。コピーをおとりの上提出下さい。また、出来る限りデジタルデータ、jpg.gifと言った形式で提出下さい。

※校正は原則行わず。いただいたものはそのまま掲載します。協議の必要があるものは大西と著者で行います。

◆会の組織について

※設立後、一年を迎えようとしています。会員数も当初の9名から15名となりました。

※会長が総てを行ってきましたが、少しずつ形を整えたいと思います。まず、会長不在も考えられますので、まず副会長に瓜生八頼子さんをお願いしました。徐々にご依頼し、三年目くらいには規約なども整えていきたいと思っています。よろしくご協力ください。

◆第12回は12/12(土)です。15時から サンピア明石

※来年1月の 第13回のみ 18時からです。14回からは15時開始に戻ります。

以後も**第二土曜日**の予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は奥付編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスの携帯電話用HPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/Top.htm>

「携帯電話でアクトスHPー携帯用画面ーを見ることが出来ます。」

※アクトスは「行動する人」の意。 ◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

編集室から

◆『4号』である。

「インマリ…」

というのは、俗に『3号雑誌』という呼び名があるからだ。

3号雑誌とは、創刊して3号ほどで休刊や廃刊する雑誌のことをいう。(P 23 参照)

どうやら、それを通過できた気がする。会員の協力のたまもので、大変嬉し

くありがたい。

いくら僕が力んでみても、一人で雑誌は出せないわけで、それを肝に銘じつつ、次は10号を目指したい。

「3号雑誌」については、本号に文をあげた。書き出したら僕の「文学遍歴」みたになり出した。

「このさいまとめてみるか」

と思いついて、第一回とした。書きたい人の参考に、また、してはならないことの手本に、読んでいただければと思う。

◆提出された原稿が多すぎて、嬉しい悲鳴になった。

長文のものは次号以下に回させていだいたものもある。

少なくとも困るし、多くても困る。「なるほど、同人誌とはなかなかのものだ」と自分で編集するようになって骨身にしみた。

無手勝流なので、次号回しの方はご容赦いただきたい。 「生一朗」



◆合評会ー毎月第二土曜日

※午後3時～5時

二十二年一月のみ午後六時から

◆場所 サンピア明石

TEL 673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

アクトス 第4号

平成二十一年十二月一日

編集 大西生一朗

いichろう

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円
